

シャーロック・ホームズ 魅力の世界

シャーロック・ホームズ / コナン・ドイル研究家 田中喜芳

1 シャーロック・ホームズは 生きている

英国のあるテレビ局が行った調査によれば、シャーロック・ホームズが実在の人物だと考えている人が6割に達した一方、ウィンストン・チャーチル元英国首相は架空の人物だと考えている人が2割5分いることが分かった。ちなみに、チャーチル自身も熱心なホームズ・ファンだったといわれている。

この調査は、2008年に約3000人を対象に行われたものだが、ホームズ人気の高さを示す一つの指標にはなろう。もちろん、ホームズは架空の人物だ。英国の医師で、後に専業作家に転身したアーサー・コナン・ドイル (Arthur Conan Doyle, 1859-1930) が生み出した世紀の名探偵である。

昨年、2009年は作者ドイルの生誕150周年だった。また、今春にはガイ・リッ

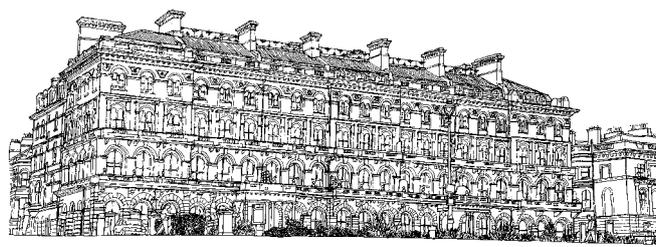
チー監督による映画「シャーロック・ホームズ」が大人気を博したこともあって、今、また静かなホームズ・ブームが起きようとしている。

今日、ドイルの名前が広く知られているのはホームズ・シリーズによるのは間違いない。若き日に従事した開業医としての業績でもなければ、晩年、莫大な私費を投じて普及活動に努めた心霊主義者としてでもない。名探偵ホームズと相棒ジョン・H・ワトスン医師の二人が難事件解決のため、英国やヨーロッパ大陸にまで出かけるこのシリーズは全部で60編(長編4、短編56)ある。以下、本論ではこの60編を総称して便宜的に「ホームズ物語」と呼ぶことにする。

ホームズ研究者や彼の熱烈なファンを米国や日本ではシャーロッキアン (Sherlockian)、また、英国ではホーメジアン (Holmesian) と呼ぶ。現在、このよ

うな人々が世界で1万人ほどいるといわれている。シャーロッキアンたちは、世界各国で約600の研究団体をつくり仲良く交流している。が、団体といっても規模はさまざま。会員が5人未満のところもあれば、本場英国のロンドン・ホームズ会のように1000人を超える団体もある。

日本にも1977年に小林司博士、東山あかね夫妻により日本シャーロック・ホームズ・クラブ (Japan Sherlock Holmes Club: 通称 JSHC) が結成され、現在約800人の会員が在籍している。クラブは小学生から80歳代の大人まで、はば広い年代、さまざまな職業の人々で構成されている。この他、学生や主婦、リタイアしたサラリーパーソンなど各人が「シャーロック・ホームズ」をキーワードに種々の研究に励んだり、ホームズゆかりの地へ旅行したりしてシャーロッキアン活動を楽しん



でいる。

世界に数ある研究団体のうち、もっとも古い歴史と世界最高の権威を誇るのが1934年にニューヨークで創立されたベイカー・ストリート・イレギュラーズ (The Baker Street Irregulars: 通称 BSI) だ。作品の中で、ホームズの助手となって働いた浮浪児たちのグループ名を、自分たちの研究団体名に付けたこのBSIは、世界でもトップクラスのシャーロッキアンの集まりとして知られる。

誰でも申し込んで会員になれるものではなく、逆にBSIから指名されて初めて入会が許可される。だから、シャーロッキアンの世界では、BSIの会員になることはノーベル賞を貰ったほど名誉なことだと思われている。

かつて、米国第32代大統領フランクリン・D・ルーズベルトも熱心なシャーロッキアンでBSIの会員だった。私は二人目の日本人会員として、1987年1月、ニューヨークで毎年開催されるBSIの会合で認証 (Investiture) を授与された。

余談だが、BSIの会員になると、BSI内におけるシャーロッキアン・ネーム (芸名みたいなもの) が与えられる。例えば、その人が医師ならば、ワトスン医師以外

の医師の登場人物名を、また、弁護士ならば、同じく弁護士の登場人物名を貰うといった具合だ。だが、あいにくシリーズ中に日本人は出てこない。そこで、BSIも知恵をしぼったのだろう。私のBSIにおけるネームは、何と「日本の箆笥 (The Japanese Cabinet)」である。これはホームズがまだ学生時代の事件《グロリア・スコット号》で、ホームズに探偵になることを勧めたトレヴァー老人が持っていた日本箆笥に由来する。

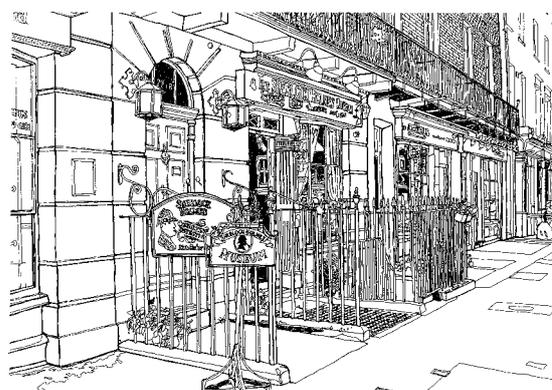
だから、BSI内でThe Japanese Cabinetと言えば、名前を言わなくても、Dr.TANAKA Kiyoshiのことだと分かるという仕組みだ。

日本人として最初にBSI会員に選ばれたのは、かつて大蔵次官などもつとめた故・長沼弘毅博士である。1962年のことだった。ちなみに、長沼博士のシャーロック・ホームズの奇怪な出来事 (The Curious Incident of Sherlock Holmes in Japan)」というものだ。

1987年という年は、ちょうどホームズ登場100周年の記念すべき年だったので、世界中でさまざまなイベントが行われた。当時、長沼博士はすでに亡くなって (1977年) いたので、私は日本人二人目のBSI

会員であると同時に、生存するただ一人の日本人会員だった。だから、「ニューヨーク・タイムズ」ほか、内外の多くのテレビ局やラジオ局が私のところへ取材に来た。とくに海外からの記者の質問が多かったのが、「歴史も文化も違う日本で、ましてや100年も昔の作品が、なぜ今でもこのように人気が高いのか」というものであった。この質問に答えることは、「ホームズ物語」の魅力の本質に迫ることにもなるので、これについては後ほどふれたい。

ところで、今まで、本論ではワトスのことを‘ワトスン博士’ではなく‘ワトスン医師’と書いてきたことにお気づきだろうか。皆さんの中には‘ワトスン博士’と記憶している方も多いことだろう。じっさい、シリーズ最初の作品《緋色の習作》(A Study in Scarlet)の冒頭でも「1878年に私 (=ワトスン：田中注)



シャーロック・ホームズ博物館(ロンドン) Kiyoshi Tanaka

はロンドン大学で医学博士号を取ると、陸軍軍医になる課程を修めるため、ネットリーの王立陸軍病院へと進んだ」とはっきり書かれている。

しかし、あるシャーロッキアンの研究論文によれば、ワトソンの学歴や軍医としての職歴を細かく調査し、当時の学位授与の仕組みなどと照らし合わせた結果、彼が医学博士号の学位を取るのはかなり難しいという結論に達したとのことだ。そこで、日本のシャーロッキアンたちはワトソンを‘博士’ではなく‘医師’と呼んでいることから、ここでも「ワトソン医師」呼ばせて頂くことにする。

一部重複するが、1887年11月発売の雑誌『ビートンのクリスマス年刊』に《緋色の習作》が発表されて以来、「ホームズ



ホームズが会った
聖パトリック病院研究棟
丸田中喜芳

物語」は、今や世界で180以上の言語に翻訳され、シリーズ収録本は『聖書』に次ぐべ

ストセラーとさえいわれるほど、今なお世界中で売れ続けている。日本語版も翻訳語版の一つだが、訳者の言葉づかいの違いで微妙に作品の雰囲気異なる。もちろん、原作は一つながら、訳者の数の分だけニュアンスの違う物語を味わうことができるのは、翻訳語版で読む者ならではの特権であろう。

2 事件現場はエディンバラ

名探偵ホームズといえば、誰もがロンドンのまちを連想する。逆に、霧にけむるロンドン、ガス灯、辻馬車、電報とくれば、多くの人がホームズの登場を期待するのではないだろうか。「ホームズ物語」には、実在・架空を含め、数多くのロンドンの地名が登場する。じっさい《赤毛組合》事件の中でホームズは、「ロンドンについての正確な知識を蓄えることが、ぼくの趣味の一つなのだ」といっている。この言葉は、作者のコナン・ドイルがロンドン生まれのロンドン育ちだからこそ書けたのではないかと錯覚しそうだが、彼はロンドン子ではない。それどころか、イングランド人ですらない。スコットランドはエディンバラの生まれ、生粋のスコットマンだ。

1886年に、ドイルが《緋色の習作》を書いたとき、彼はポーツマス市で全科の開業医をしていた。生まれてこのかた、一度もロンドンに住んだことがないドイルは、当時、ロンドンのまちの様子からず、事件の舞台はロンドンなのに、かつて暮らした生まれ故郷エディンバラの裏町風景を使った。

《緋色の習作》は復讐劇のひとつだ。ロンドンのブリクストン通りの外れ、ローリントン・ガーデン3番の空き家で、アメリカ人、イノック・J・ドレPPERの死体が発見されることから話が始まる。ブリクストン通りはロンドンに実在する。今日のブリクストン通りは南ロンドンの繁華街の一つだが、ホームズの時代には通りの東側にみすぼらしい家が並んでいたに過ぎなかったという。一方、死体が発見されたローリントン・ガーデン3番は架空の地名だ。作品中、ドイルはこの場所について次のように描写している。

ローリントン・ガーデン3番の家は不吉でおどすような様相を呈していた。道路から少し引っこんで建っている4軒の中の1軒で、2軒は人が住み、2軒は空き家だった。空き家にはカーテン

もない暗い窓が3段に並んでいた。窓はうつろでわびしく、曇った窓ガラスのあちこちに「貸し家」の札が貼られ、まるで白内障のようだった。枯れかかった植物がまばらに生えている小さな庭が道路と敷地を分けていた。庭の中を狭い小道が通っている。色は黄色っぽく、粘土と砂利が混じってできているらしい。(笹野史隆訳)

ローリントン・ガーデンという地名はエディンバラの中心地、エディンバラ城の南約600メートルのところに実在する。当時は、ドイルが書いたようなうら寂しい雰囲気を持っていたようで、いま引用した描写はドイルのまったくの創作という訳ではない。だが、なぜドイルがそんなうら寂

しい場所を知っていたのか。それは、エディンバラ大学医学部の学生時代、ドイ



ルがそこからわずか500メートルほど東のジョージ・スクエア23番に住んでいたからだ。

「ホームズ物語」には舞台となったロンドンのまちが正確に描写されているかのようなイメージがある。だが、細かく検証すると、このように、作品中にエディンバラのまちの様子が描かれていたりして興味深い。

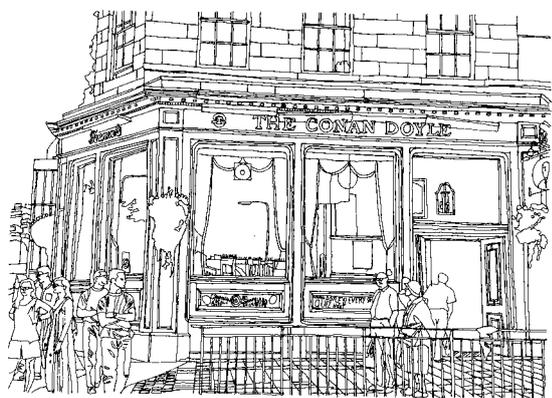
昨年の Doyle 生誕 150 周年にあたっては、世界各地で記念のイベントが開催された。Doyle の母校エディンバラ大学で Doyle 関係の展覧会が開催されたほか、米国のハーバード大学ホートン図書館でもシンポジウムと展覧会が開催された。世界のシャーロキアンたちは、この「Doyle 展」に特に注目した。それというのも「シャーロック・ホームズ展」ならば、以前にも何度か開催されたことがあるが、Doyle 展は記憶になかったからだ。例え

ば日本の例で「ホームズ展」の歴史を見てみよう。

1985年7月に、日本初の「シャーロック・ホームズ展」が東京神田の三省堂本店で開催された。この後、「ミステリ・魅ステリアス展」(1986年、東京池袋・東武デパート)、「シャーロック・ホームズ登場100周年展」(1987年9月、東京日本橋・丸善本店)、「シャーロック・ホームズの世界展」(1994年9月、東京・松坂屋銀座店ほか)と幾つかの大きなホームズ展が開催され、いずれも人気を博した。

いま紹介した展覧会は、すべて私の膨大なホームズ・コレクションの中から、その一部を展観したもので、Doyle 自筆の手紙や署名入りの初版本、ホームズ関連グッズなど、数々の珍しい品を初めて公開したこともあって、連日、開場直後から大入りの大人気であった。

閑話休題。冒頭でも書いたが、今日の Doyle の名声は「ホームズ物語」作者としてのものだ。その一方、あまりにも高いホームズ人気は、Doyle が著した他の作品を不当に脇へ追いやってしまった。これはじつに不幸なことだといえる。それが、昨年の「Doyle 展」以来、徐々にではあるが、彼が著した他の作品にも目



ホームズ・ファン・ドイル(エディンバラ) Kiyoshi Tanaka

が向けられてきたのは嬉しいことだ。

3 はば広いドイルの著作

本来、ドイルがなりたかったのは探偵小説作家として成功することではなく、歴史小説作家として英国文学史にその名前を残すことだった。ホームズが人気絶頂だった1893年、ドイルは《最後の事件》で、名探偵をスイスのライヘンバッハ滝で宿敵モリアーティ教授と決闘させ、二人とも滝つぼに落として殺してしまった。これで歴史小説に専念できると思ったが、そううまくはいかなかった。

当時、「ホームズ物語」を月刊誌『ストランド・マガジン』に連載していたロンドンのジョージ・ニューズ社をはじめ、ドイルのもとにも、読者からホームズ再開を望む強い声が数多く寄せられた。ロンドンのまちには、ホームズの死を悼んで腕に喪章をつけて歩く人まで現れる始末だった。出版社からの度重なる要請(と、高額な原稿料の申し出)もあって、1903年、ドイルはついに《空き家の冒険》で、名探偵をロンドン、ベイカー街の下宿に生還させた。以後、ドイルはもうホームズを殺すようなことはせず、生涯で約40年間にわたりシリーズを書き続けたのだっ

た。

最初の作品「ササッサ谷の謎」が雑誌『チェインバーズ・ジャーナル』に掲載された1879年から、ドイルが亡くなる1930年までに発表した作品数は、小説で232編、単行本にして36冊になる。また、自伝やノンフィクション、心霊術関係の専門書までを含めると54冊になる。

一例として、これらの作品をジャンル別に分けると、次のようになるのではないかな。

(1)「消えた臨急」「甲虫(カブトムシ)採集家」など、「ホームズ物語」以外のミステリー小説。(2)「縞のある衣類箱」「ポールスター号船長」などの海洋奇談小説。(3)「クロクスリの王者」「ファルコンブリッジ公」などのボクシング小説。(4)「大空の恐怖」「新しい地下墓地」などの恐怖小説。(5)「ヒラリー・ジョイス中尉の初陣」「ブ



ベイカー街のカフェ

志田喜芳

ラウン・ペリコード発動機」などの冒険小説。(6)「シャーキー船長」「シャーキー船長との勝負」などの海賊小説。(7)「マイカ・クラーク」「白衣の騎士団」などの歴史小説。(8)「マラコット深海」「失われた世界」などの空想科学小説。(9)「心霊術の歴史」「コナン・ドイルの心霊ミステリー」などの心霊術関係のノンフィクションやフィクション。(10)「ボーア戦争」などの政府の政策宣伝関係著作。(11)『スターク・マンローからの手紙』『コナン・ドイルのドクトル夜話』といった自伝的小説や医学関係小説など、その範囲は多岐にわたる。

あるいは、皆さんも『ホームズ物語』以外のドイル作品のうち、今あげた作品のいくつかを目にしたことがあるのではないだろ



ジョンワル半島
セント・アイブス

Kiyoshi Tanaka

うか。例えば「失われた世界」は、南米奥地に19世紀末でも恐竜が生き

て、探検隊がそれを発見するという話で、映画「ジュラシック・パーク」の原案にもなった作品だ。また、『スターク・マンローからの手紙』（河出書房新社刊）は、ドイル自身が心血をそそぎ、こよなく愛した作品の一つで、彼が最も末永く生き続けると考えていた小説である。

ドイルの数多い著作の中でも、同小説は、まさに原点に位置づけられる名作だと私は確信する。真理とは何か、人間とは何かなど、誰もが悩む永遠のテーマを扱うとともに、ドイル自身の若き日の苦悩が赤裸々につづられ、彼の思想や哲学を理解するうえで、これ以上の作品はない。

4 シャーロック・ホームズのモデル

ドイルがスコットランドのエディンバラ生まれだということは、すでに書いた。父チャールズは市役所に勤める建築職の公務員であったが、アルコール依存症のため47歳で役所を退職した。当時、ドイルは20歳。エディンバラ大学医学部の学生だった彼は、さまざまなアルバイトをして学費を稼がざるを得なかった。

このとき出会ったのが、恩師ジョゼフ・

ベル教授だ。ベル教授こそホームズのモデルになった人物である。教授は外科学の権威だったが、患者が診察室に入ってくるやいなや、言葉づかいや服装、動作などから、その人がどこの出身でどのような職業の人かを言い当てたと伝えられている。この様子をアルバイトとして、教授のそばで見ていたドイルが後にホームズのキャラクターに使ったのだった。しかし、ホームズやワトソンの考え方は、ドイルの思想を代弁したものに他ならない。二人は、まさに、ドイルの分身だといえよう。

後年、流行作家になったドイルにとって、父の精神病院入院は隠しておきたい秘密だった。だから、この事実が明らかになったのは近年になってから、英国のシャーロッキアンの研究によるものだ。彼は、ドイルの父親がスケッチブックに描いた建物を長年探し続け、ついにそれが精神病院であることを突きとめたのだ。この発見は、ドイルの人格形成を研究するうえで、大きな一歩となった。だが、このような地道な研究は、やはり地の利がある英国人でなくては出来ないのも事実だ。

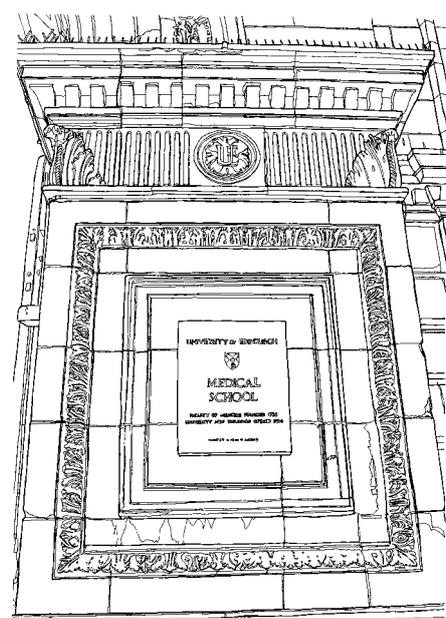
今日、ドイルがロンドンの眼科開業医

から専門作家に転身した経緯は、「眼科医を開業したものの、待てど暮らせど患者がさっぱり来なかったから、ベル教授をモデルに暇にまかせてホームズ作品を書いた」というのが世界の研究者の間で定説になっている。しかし、これは事実と異なる。その理由はこうだ。

ドイルが医を開業したのが1891年4月1日。最初の短編《ボヘミアの醜聞》の原稿を出版代理人A・P・ワットに送ったのが4月3日のことだ。後の作品をみると脱稿するまでに約1週間かかっているから、逆算すれば3月末には原稿を書き始めていた計算になる。だから「待てど暮らせど患者が来なくて」は怪しくなる。そもそもこのような説が信じられるようになった経緯は、ドイルが自伝『わが思い出

と冒険』に書いた次の一節による。

毎朝
モンタ
ギュー・
プレイ



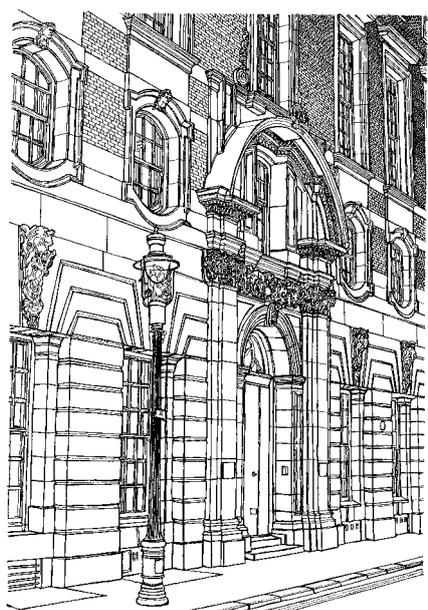
エディンバラ大学医学部

Kiyoshi Tanaka

スの下宿から徒歩で通い、午前10時から午後の3時か4時頃まで患者を待っていたが、静けさをやぶるベルの音は一向に鳴らなかった。瞑想と仕事にこんな適した場所があるだろうか。ここは理想的だ。診療がまったく期待できない一方、文学的将来にかけるチャンスはいくらでもあるという具合だった。

5 「ホームズ物語」の魅力を探る

このように、ドイルが専業作家になった経緯は、本当は自伝とは異なるとはいえ、「ホームズ物語」が魅力に溢れた作品であることに、いささかも変わりはない。次に「ホームズ物語」の持つ魅力について考えてみたい。まず、多くの人が指摘するのは、名探偵の優れた推理と行動力



ロンドン・ストランド街

Kiyoshi Tanaka

で犯人が捕まり、難事件が見事に解決する醍醐味だ。このように、勧善懲悪的な要素が物

語の大きな魅力になっているのは間違いない。だが、それだけの理由で120余年にわたって読み継がれてきたとは思えない。

その他、ガス灯や霧のロンドン、電報、蒸気機関車、馬車など物語の背景になったヴィクトリア朝への郷愁をあげる人も多い。しかし、それは現代の読者の感覚である。「ホームズ物語」は《緋色の習作》(1887年発表)から《シヨスコム荘》(1927年発表)まで、約40年間にわたって書き継がれたシリーズだ。最後の作品群はともかく、月刊誌『ストランド・マガジン』に短編の連載が始まった1890年代、当時の読者にとってホームズは同時代の人間であり、ヴィクトリア朝は目の前にある日常風景そのものだった。

時空を超えた「ホームズ物語」の魅力を考えてとき、私には「事件」という核を通じて巧みに描かれた人生の機微や、登場人物の生き方に対する読者の共感が一つの回答であるように思える。「ホームズ物語」には浮浪児の少年からボヘミア国王まで、あらゆる階層に属する1000人以上の人々が登場する。彼らの生き方や考え方が実に巧みに描かれているのである。

作品の舞台が広範囲なのも大きな魅力の一つだろう。事件現場にロンドンが多いのは確かだが、登場する地名はなにもロンドンだけではない。50以上の国と地域、例えば英国内に限っても《悪魔の足》事件の舞台となったコーンワル半島や、長編《バスカヴィル家の犬》の舞台になったダートムア地方など、約280を超える地名が登場する。誠にスケールの大きい物語なのだ。ちなみに《高名の依頼人》には「奈良に近い正倉院」とか「聖武天皇」という記述も出てくる。

その他、‘ホームズ語録’も忘れてはならない。全編を詳細に読み込むと、随所でホームズが示唆に富んだ言葉を言っていることに気づく。たとえば「ただ見ると、観察するのでは大違いだ」「データが揃わないのに推理をするのは大きな間違いだ。人は事実に見合う理論的な説明を求めないで、理論に合うよう事実をねじ曲げてしまう」「探偵術において最も大切なのは、多くの事実の中から、どれが付随的な要素で、どれが本当に価値ある要素なのかを、きちんと見分ける能力だ。これが出来ないと、精力と注意力はただ浪費されるばかりで、集中させることが出来ない」など、これらは、日本経

済が低迷する一方で、IT革命による情報過多の現代、日々刻々の状況判断を迫られるビジネスパーソンにとっては、ひときわ役立つ言葉ではないだろうか。ホームズ流の探偵学は、きちんと読みこなせば、現在の景気分析と将来の経済予測にも十分応用できると私は考えている。

ホームズは世界初、ただ一人の諮問探偵という設定だ。奇怪だが犯罪かどうか不明なものから、警察がさじを投げた事件まで、ホームズとワトスン医師が住むベイカー街221Bの下宿には、さまざまな事件が持ち込まれる。

依頼人の話を丹念に聞き、情報を収集し、分析する。そして知力、気力、行動力を振り絞って事件解決に邁進するホームズの姿勢は、企業経営をはじめ、今日の各界においても学ぶべき点は多いはずだ。



再現されたホームズの書斎(ロンドン)

久田幸英

6 照明器具の研究

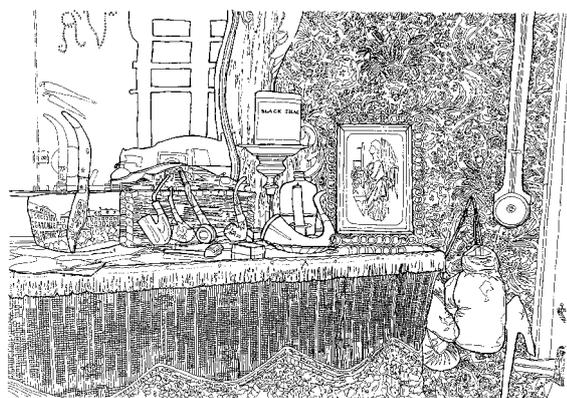
最後に「ホームズ物語」は役立つということを指摘しておきたい。「ホームズ物語」を読むと、ヴィクトリア朝の庶民の生活や、当時の物価、まちの様子などが手に取るようによく分かる。郷愁とは違う、これは当時の社会の様子を知る教科書的要素といった方が当たっているかも知れない。

私事で恐縮だが、いま大学の文学部で「西洋文化史」の講座を担当している。教室内の誰も見たことがないヴィクトリア朝の社会と文化を、学生たちに楽しみながら理解してもらおうと、毎回、講義には工夫を凝らすよう努力している。これまでの経験から、私は、難しい専門書を使うよりは「ホームズ物語」の一場面を話す方が、よほど理解しやすいと思っている。そこで一例として、我々の生活に身近な「照明器具」に注目し、ヴィクト

リア朝の変化を、「ホームズ物語」に出てくる照明器具の記述から探ってみたい。

当時の照明器具といえば、思い浮かぶのは、まず「ガス灯」、次が「電灯」だろう。そこで、注意深く「ホームズ物語」を読むと、ガス灯に関する記述が18カ所、電灯に関する記述は7カ所あることが分かる。紙幅の関係で全部は紹介できないが、例えば、1887年の事件《青いガーネット》には「帽子についた獣脂のしみも、一つや二つなら偶然ということも考えられる。だが五つ以上もあると、いつも獣脂ロウソクを使う男一つまり、夜、片手に帽子、片手にロウソクを持って階段をのぼる男と考えられる。とにかく、ガス灯の口から獣脂がたれることはないからね」とある。

これから、1887年当時は、まだガスが引かれてない家もあったことが分かる。翌1888年の事件《四つの署名》には「ほら、向こうのガス灯の下を、人がぞろぞろと歩いているよ」とあり、街灯にガスが使われていた様子が描写されている。一方、同じ1888年に起きた《バスカヴィル家の犬》には、「半年のうちに電灯をずらりとつけることにします。館の玄関の前に千



再現されたホームズの寓居(ロンドン)

Kiyoshi Tanaka

燭光のスワン・エジソン電灯をつければ、もう寂しくはなくなるでしょう」との記述がある。このことから、この頃には、電灯を設備する家もあったことが伺い知れる。

20世紀に入ると、照明器具として登場するのは電灯ばかりになる。1903年の事件《スリー・ゲイブルズ》には、「1分後に我々（＝ホームズとワトスン）は、なかば暗くして、所どころピンク色の電灯を配した、広くて素晴らしいアラビアン・ナイト風の客間にいた」。また、1914年の事件、ちょうど第1次世界大戦が起きる前夜に発生した《最後の挨拶》には「フォン・ボルクはそれを開けると、先に立って行って、電灯のスイッチを入れた」との記述もみられる。

これらの記述と事件発生年を一覧表にして考察すると次のようになる。「ホームズ物語」の中では、1886年の事件《入院患者》で初めてガス灯に関する記述がみられ、1887年10月の事件《赤毛組合》までは、照明器具といえばガス灯のみである。同11月の《瀕死の探偵》に初めて電灯が登場するものの、その後も、依然としてガス灯が続き、次に電灯が登場するのは、今書いた1887年の《バスカヴィル

家の犬》である。

やはり、まだ当時は、一般的な照明器具といえばガス灯が主流であったのだろう。しかし、1895年の事件《3人の学生》くらいから電灯に関する記述もみられるようになり、登場人物の職業にも「電気技師」の文字が出てくるなど、世の中に電灯がだいぶ普及してきたことが分かる。ただ、ガス灯も時おり顔を出すところをみると、ガス灯から電灯へ徐々に移行していった時期であったことが伺える。

そのガス灯も1902年の事件《レイディ・フランセス・カーファクスの失踪》を最後に、ぱったりと姿が消え、変わって1903年の《スリー・ゲイブルズ》や、1914年の《最後の挨拶》の頃には電灯だけになる。これらから、世の中にもある程度、電気が普及し一般的な照明器具として電灯が使われ始めたことが「ホームズ物語」から伺い知れるのである。



ただ、今あげたのはドイルの記述によるものであり、これが正しいかどうかは、また別の問題だ。これを検証するためには、ヴィクトリア朝の照明器具に関する内外の膨大な記録を読まなければならない。この作業を経て、記述の正しさが確認できたら、当時の照明器具が登場する種々の映画の一場面を学生たちに見せ、



(旧ネットリ) - 陸軍病院

Kiyoshi Tanaka

視覚からも理解させながら講義を進めるというのが私の流儀である。

7 まとめ

全部で60編といえども、ほとんどが短編であるから文庫本にすれば10冊程度のものだ。「ホームズ物語」は、犯人が分かって、それで終わりというものではない。たとえ短編でも徹底的に読み込めば、そこからまた大きな世界が広がることもある。読み方も各人により違っていい。これを契機に、今一度「ホームズ物語」に親しむことをお薦めしたい。そして、あなた自身が見つけた「ホームズ物語」の魅力をも十分に楽しんでいただきたいと思います。

(イラストも筆者)

筆者プロフィール

田中 喜芳 (たなか きよし)

横浜生まれ。米国・ニューポート国際大学大学院客員教授。関東学院大学文学部講師。人間行動学博士 (Ph.D)。日本推理作家協会会員。日本病跡学会会員。鎌倉ペンクラブ幹事。

ベイカー・ストリート・イレギュラーズ (米国・BSI)、日本シャーロック・ホームズ・クラブ (JS HC)、ロンドン・ホームズ会 (英国) など、各国34の研究団体に会員・名誉会員として在籍する。

早稲田大学、関東学院大学、横浜市立大学の各エクステンションセンターで、ホームズ/ヴィクトリア朝講座の講師を務める。主な著書に『シャーロック・ホームズは生きている』(NOVA出版)、『シャーロックの優雅な週末』(中央公論社)、『STUDIES IN SCARLET』(米国・GASOGENE PRESS社・共著)、『エディンバラゆかりの文学者』(あるば書房・共著)ほか多数がある。主な翻訳書に『シャーロック・ホームズの見たロンドン』(河出書房新社)、『スターク・マンローからの手紙』(河出書房新社)ほか多数がある。本年、かまくら春秋社から『(仮称)シャーロック・ホームズ小事典』を刊行予定。イラストも、国内外の本に掲載され高い評価を得ている。

